

## 1. 研究の背景と目的

### 1.1 実践共同体

Lave と Wenger は、従来の人は知識を伝達されることによって学習するという学習観に対し、共同体に参加することが学習であるとする新たな学習理論を提出した。Wenger らは、こうした学習の単位となる共同体を実践共同体と名づけた<sup>1)</sup>。

実践共同体とは「あるテーマに関する関心や問題、熱意などを共有し、その分野の知識や技能を、持続的な相互交流を通じて深めていく人々の集団」のことである。すなわち、実践共同体とは、その活動の中に学習が埋め込まれた共同体であり、メンバーは実践共同体の活動に参加することによって学習する。Wenger によれば、職業人のための実践共同体には、組織の部署内のもの、部署を越えたもの、組織を越えたものが存在する<sup>2)</sup>。

### 1.2 実践共同体における学習

#### 1.2.1 意味の交渉

Wenger は、実践共同体における学習を「意味の交渉」と捉えている。メンバーは、それぞれの共同体で決められた取り組みを行う中で、互いに関与しあい、意味を交渉することを通じて学習する<sup>3)</sup>。つまり、意味の交渉の中こそ学習の要素が埋め込まれているという見方である。

このような捉え方は、従来の知識やスキルとして何を学ぶべきかという視点から学習を検討していくあり方に対して、共同体における実践の中に埋め込まれた学習、すなわち、意味の交渉に埋め込まれた学習をどのように構成していくかという視点から学習を検討しなおすことを促す。

#### 1.2.2 図書館員の共同体

Wenger は、個々の実践共同体を特徴づけるもの一つとして、実践共同体の領域をあげている<sup>2)</sup>。実践共同体の領域としては、職業領域や専門領域があげられる。

この見方からは、個々の実践共同体は、その対象とする職業領域や専門領域によって異なる固有のものとして位置づけられる。

図書館界には古くから職能団体が存在し、同じ図書館員として組織を越えて共同体を形成してきた。職場外で自発的に集まり学習する図書館員の共同体も存在している。しかし、こうした図書館員の共同体における学習について、どのような学習の要素が埋め込まれているのかという視点からは具体的に明らかにされていない。

本研究は、図書館員の共同体に焦点をあて、そこに参加する学習者が意味の交渉を行う中で、どのような要素によって学習し、その結果何をもたらされているのかについて、共同体に参加する学習者自身の視点から明らかにし、今後の共同体を利用した学習を検討するための示唆を得ることを目的とする。

## 2. 調査方法

調査対象となる共同体を選定するにあたり、まず文献調査と紹介によって候補となる共同体を選定した。その後、実際の活動に参加し観察することによってメンバーが相互に関わりあっていることを確認した。その中で、意味の交渉の中に埋め込まれた学習をみていくという本調査の目的に照らし、特にメンバーの相互関与が活発に行われていた共同体を選択した。その結果、今回調査対象となったのは、職場外で自主的に学習活動を行う図書館員の共同体 5 つである。対象となった 5 つの共同体のプロフィールを表 1 に示す。

参加者の視点からの自由な語りを得るために、共同体に参加するメンバーを対象に半構造化インタビューを行った。インタビューでは、面接が 13 名、メールが

6名、全体では19名の協力を得た。インタビューは、一回につき2～3時間程度行い、内容はすべて録音し、テキストに書き起こした。書き起こしたテキストをもとに、意味の交渉を軸として、絶えざる比較法<sup>4)</sup>に則りカテゴリを生成した。

	A	B	C	D	E
領域	レファレンス	レファレンス	レファレンス	ストーリーテリング	学校図書館
メンバーの所属館種	公共図書館	公共図書館	公共図書館、 大学図書館	公共図書館	学校図書館
活動開始年	1994-2001	1995-	2000-	1988-	1985-

表1 調査対象となった図書館員の共同体のプロフィール

### 3. 結果

抽出したカテゴリとその関係の全体像をまとめたものが図1である。

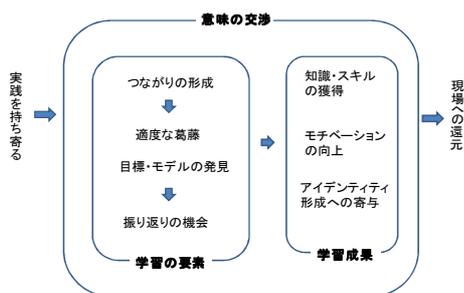


図1 図書館員のコミュニティにおける学習

#### 3.1 学習の概観

実践共同体の枠組みによって学習を促した場合、学習の中心となるのは意味の交渉である。ここでいう意味の交渉とは、メンバーがお互いの実践に対し、共同でその意味を付与していく作業のことである。

意味の交渉という大枠の学習を成り立たせるための条件として、「実践を持ち寄る」、「学習成果を職場への還元」という2つのプロセスが存在する。すなわち、意味の交渉が行われるためには、意味の交渉の素材となる図書館での実践が持ち込まれるというプロセスが必要となる。さ

らに、学習の成果がメンバーによって図書館の現場に還元されるという回路を持つことにより、図書館の現場と接続した学習が成り立っている。

#### a. 実践を持ち寄る

意味の交渉が成立するためには、意味の交渉の素材としてメンバーの実践が持ち込まれることが必要となる。それらは例えば、レファレンスの回答の記録、オリエンテーションで利用した資料などの具体的な作成物や、ストーリーテリングの実演そのもの、実践の事例、経験談などである。職場外の共同体の場合には、実践を持ち込むプロセスにより、図書館の現場と接続している。

#### b. 現場への還元

メンバーは、共同体での学習成果をそれぞれの現場で活用している。言い換えれば、共同体における学習の成果は参加するメンバーを通じて図書館の現場へと還元されている。

「実践を持ち寄る」、「現場への還元」というプロセスの存在によって、共同体での学習、現場での実践、さらなる学習というように学習の流れと循環が生じることになる。この循環が定期的に訪れることにより、メンバーはさらなる学習へと自然に進んでいくことになる。

学習のプロセスが循環して継続していくことはメンバーが学習を継続するために重要である。例えば、このプロセスを脅かすものの一つとして図書館員でなくなることがあげられる。図書館員でなくなったメンバーの中には、学習を継続する意義を見失い共同体から離脱してしまうケースもみられた。

#### 3.2 学習を構成する要素と学習プロセス

次に、共同体における学習である意味の交渉に焦点をあてる。学習を構成する要素として生成されたカテゴリは、①つながりの形成、②目標・モデルの発見、③適度な葛藤、④振り返りの機会の4つである。

以下、各学習の要素の内容と、それぞれの要素が学習プロセスにおいて果たす役割について述べる。

### ①つながりの形成

相互に関与することを通じて、メンバーはお互いのことを知りあい、徐々につながりを形成していく。お互いのことを理解し合うことによって信頼感に基づいた率直なやりとりが可能となり、メンバー同士はさらに関与を深め、共同体に対して肯定的に捉えるようになる。

つながりは、以下の2つの側面から認識されている。

#### (1)人的ネットワーク

仕事上で聞きたいことがあるときなどに頼れる人的ネットワーク。このことについてはあの人に聞けばよい、というように活用される。

#### (2)大切な仲間

同じ図書館員として理想や悩みを語り合える仲間。仲間として認識することで、メンバーは共同体を自分の居場所であると感じるようになる。

つながりの形成はメンバー同士の信頼感の醸成と関係しているために、つながりの形成の度合いが相互関与の活発さや深み、さらには参加するメンバーの満足感にも関係している。つながりの形成はメンバーの意味の交渉を通じた学習を促進するための前提となる。

#### ②目標・モデルの発見

相互関与を通じて、メンバーは目指すべき目標や考え方、振る舞い方のモデルを見出している。目標やモデルとなるのは、具体的な実践や人物、考え方や振る舞いなどである。こうした目標やモデルの発見により、メンバーは目指すべき方向へ方向付けられ、動機付けられている。

目標やモデルを発見することによって、目指すべき方向を感じ動機づけられたメンバーは、その方向に近づくための取り組みを行う。自分でもすぐにアレンジしてできそうなことは短期的な目標としてすぐに取り入れられ、現場に還元していく。長期的な目標やモデルは、いつかはあのようになりたいという目指すべき理想像として保持され、やはりメンバーを動機づけ、メンバーのその後の実践と学習を方向づけることになる。

#### ③適度な葛藤

相互関与を通じて、信念を持って仕事をしているメンバーの姿をみて感銘を受ける、自分とは異なる多様な考え方の存在に気づかされる、あるいは誤りを指摘されるなど、参加するメンバーに気づきを与える適度な葛藤がもたらされている。

適度な葛藤は、メンバーにとっての学習の中身そのものを意味している。つまり、共同体において「何を学習したか」は、例えば「学習を支援するためにそこまでやるんだ」といった衝撃を受けた内容そのものであり、メンバーにもたらされた葛藤の内容こそが、学習の中身そのものを表している。

適度な葛藤という学習すべき内容がもたらされることは、②の目標・モデルの発見による動機付けや方向付けとともに、④の振り返りを促すきっかけとして作用している。

#### ④振り返りの機会

目標やモデルを見出すことにより、あるいは適度な葛藤がもたらされることによって、自分自身の図書館での実践や態度や考え方について振り返って考える機会がもたらされる。振り返りのプロセスは、葛藤がもたらされた内容、つまり学習内容について深く考える機会であり、メンバーの学習を深化させる。

メンバーは、このプロセスを通じて、特定の実践に対して語れるだけの、自分なりの意見や考えである持論を形成していく。さらにこうした持論は、図書館員としての実践に対する自分自身の信念につながっている。学習を深化させる振り返りの機会は、学習内容を学習の成果へと変化させ高める梃のような役割を果たしている。

### 3.3 学習成果

学習成果として、①知識・スキルの獲得、②モチベーションの向上、③アイデンティティ形成への寄与、が見出された。このうち、知識・スキルの獲得とモチベーションの向上は、毎回の共同体への参加によってももたらされる短期の学習成果であるが、アイデンティティの形成への寄与は、共同体への継続した参加によってもたらされる長期の成果である。

#### ① 知識・スキルの獲得

メンバーは、意味の交渉を通じて、様々な知識やスキルを獲得している。共同体での学習を長く続けたメンバーほど、自身の知識やスキルに対する自負をもっていった。

特に職場外の共同体においては、メンバーは、自分の組織での学習範囲を超えた知識やスキルを獲得している。メンバーは、例えば、レファレンスブックに対する知識やストーリーテリングのスキル、子どものための本とその本に対する子供の反応といった知識を獲得しており、これらは一見どこの現場でも得られる知識やスキルにみえる。しかし、多くのメンバーが現場ではそうした余裕がなく、なかなか身につけることができない、あるいは自分の所属する図書館では学習範囲が限られていると語っていた。このことは、職場外の共同体に参加することによって、組織の中で学べる範囲を超えた学習が可能となっていることを示している。

#### ② チェンジの向上

共同体での学習成果としてモチベーションの向上があげられる。モチベーションの向上は、目標やモデルを発見することによる動機付け、さらには目標に向かって一緒に頑張る仲間を見出すことによる情緒的な側面によってももたらされる。

学習成果としてのモチベーションの向上は、メンバーが働く現場において、図書館員としてさらなる実践を行っていくために、継続的な学習を行っていくために、メンバーを突き動かすものとなっている。

#### ③ アイデンティティ形成への寄与

長期的な学習成果としてアイデンティティ形成への寄与があげられる。

図書館員としてのアイデンティティは、図書館員とはどのようなものかといった信念や、自分はどのような図書館員なのかといった自己認識などによって形成されると考えられる。意味の交渉の中に埋め込まれた目標やモデルの発見、振り返りの機会といったプロセスは、こうしたアイデンティティの形成に寄与している。しかし、今回の分析では、実際にアイ

デンティティを確固たるものにするのは、図書館の現場における経験であった。職場外の共同体での学習は、図書館員としてのアイデンティティ形成に寄与しているといえる。

#### 4. まとめ

図書館員の共同体における学習は、メンバーが自発的に実践を持ち込み、その実践について他のメンバーによって意味が交渉される、言い換えれば、図書館員が自発的に実践を持ち込み仲間に評価してもらうことによって学ぶというものであった。

そこでの学習は、図書館員同士の活発な相互関与を通じて、同じ仕事をする仲間とのつながりをもたらし、短期や長期の目標やモデルを見出させることで学習を方向づけ、動機づけ、かつ適度に刺激的な葛藤をもたらし、自身の実践や考えや態度についての振り返りを促すという要素とプロセスによって成り立っている。その結果、学習成果が現場へ還元されていくというあり方は、今後の共同体を活用した学習を検討していく上で示唆的である。

今後は、これらの要素から再度実際の共同体を見直し、学習がうまく機能するための条件、あるいは阻害要因などを検討すること、さらには、これらの学習要素を組み込んだ学習カリキュラムの構築していくことが課題となる。

#### 参考文献

- 1) Lave, J., Wenger, E. 状況に埋め込まれた学習：正統的周辺参加. 産業図書, 1993.
- 2) Wenger, E., McDermott, R., Snyder, W M. コミュニティ・オブ・プラクティス：ナレッジ社会の新たな知識形態の実践. 翔泳社, 2002.
- 3) Wenger, E. Communities of practice: learning, meaning, and identity. Cambridge University Press, 1998.
- 4) Strauss, A L., Corbin, J M. 質的研究の基礎：グラウンデッド・セオリー開発の技法と手順. 第2版, 医学書院, 2004.